

当した34人の診療場所、診療内容、診療回数、ならびに患者の有する主たる基礎疾患の調査・分析を行った。また、治療が終了し協力の得られた17名に対してアンケート形式による診療に対する評価を行った。

【結果および考察】調査対象者は34名(平均年齢:70.3±9.3歳)であり、訪問診療回数は384回であった。また、訪問先を地域別にみると、平成12年度においては、今まで依頼のなかった当別町以外の周辺市町村からの依頼が増加していた。このことは、訪問歯科診療が徐々に地域に認知されてきた結果と考える。対象者の有する基礎疾患の内訳は、診療により循環動態に変動をきたしやすいと考えられる脳血管系、循環器系の疾患が66.6%であり引き続き診療時の循環動態の把握が必要と考える。

診療内容は、義歯補綴に関する診療が67.6%であり、その割合は過去の調査結果と比較して減少していた。このことは、専任の歯科衛生士の配置によって、残存歯のケアを含む保存処置の増加やエックス線撮影機、レー

ザー等の診療器機の整備に伴い診療内容の幅が広まったためと考える。

アンケート調査による訪問歯科診療に対する評価については、以下の回答を得た。治療後の咀嚼能力は「よく咬めるようになった」と回答したものが82.4%、診療に対する満足度については「満足している」と回答したものが88.2%、今後、本システムの利用については「また利用したい」と回答したものが100%であった。以上の結果より、現在の診療システムで大多数の対象者より満足を得られているのが確認された。問題点としては、治療期間について11.8%の方が「長かった」と回答しており治療により高齢者に与える疲労を軽減できるよう術者の配慮が必要と考える。また口腔ケアの指導を希望する者も少なくなく、今後は、更に口腔ケアに対する関心度を高め、治療のみならず予防やメンテナンスなどを考慮したりコールシステムの確立が重要であると考ええる。

27. 針・本体分離型コンピューター制御歯科用注射器(The Wand™)は視覚的に与える不快と不安を抑制する—各種注射器との比較検討—

○大桶 華子, 工藤 勝, 片桐 和人,
佐藤 雄季, 河合 拓郎, 加藤 元康,
國分 正廣, 新家 昇
(北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座)

【目的】高い不安状態では針刺入時の痛み感覚が強いため¹⁾、不安などの感情は痛みの管理上重要な要因である。歯科用注射針と注射器本体が分離したコンピューター制御の注入システム注射器(The Wand™:Wand)を2000年5月から臨床と教育に用いている。そこで、Wandをはじめ各種歯科用注射器が患者へ視覚的に与える不快や不安を定量・観察した。

【方法】対象は心理テスト(日本版STAI)の結果にて普通・低い特性不安者11名(女/男性:5/6名,平均年齢24.8歳)とした。注射器はWandを含めた10種類を個々に見せ、不快と不安を測定した。不快の程度はVisual Analogue Scale(VAS:0:不快なし~100:耐え難い不快)を用い、状態不安は顔不安スケール(FAS:笑顔の0~強い不安顔の5得点)²⁾にて評価した。なお、針は歯科用注射針31G(φ0.28×12mm)を装着した。

【結果】VAS最大値は2・ガラス注射器50.8±30.0(平均±標準偏差)得点,ピストル型電動注射器47.9±33.3得点,Wandは16.2±20.3得点と最小値を示した。FAS最

大値は2.4±1.4得点のピストル型電動注射器,光沢金属注射器2.2±1.3得点,FAS最小値はペン型青色半光沢注射器1.0±0.7得点であった。VASとFASの総合で,Wand™が最も低値を示した。

【考察】視覚的に与える不快と不安を増大するのは、大きく・ピストル型・光沢金属色の注射器であった。一方、手の中に入るほど小さく、非金属色でペン型の注射器は不快と不安を抑制した。臨床では、歯科治療・注射恐怖症患者、小児・知的障害者などに対する、針刺入・注入の痛みを緩和するため、不快・不安を増大させる注射器の使用は積極的に回避すべきである。Wandは視覚的な不快や不安を抑制し、さらにその注入システムの面からも、これらの症例に対して有用であると考ええる。

【文献】

- 1) 工藤 勝他:日本歯科麻酔学会誌,2000;28(5):587-593.
- 2) 工藤 勝他:日本臨床麻酔学会誌,1999;19(8):S243.